

(8) 総合研究 (卒業課題) [4年]

2025年度総合研究 チームテーマ、指導教員一覧 (A・B共通)

チームテーマ番号、チームテーマ		担当者 (☆はコーディネーター) および指導可能テーマの一例	
1	適応行動の認知的メカニズム	櫻井研三☆	視覚科学、視覚を中心とした知覚心理学
		加藤健二	日常行動の認知心理学的分析 (食行動、空間行動など)
2	心身の健康と行動	金井嘉宏☆	行動科学と認知科学に基づく臨床心理学
		東海林 渉	病い、障害、健康に関する心理学的研究 (病いの語り、障害への適応、ピアサポート等)
		臼倉 瞳	感情、パーソナリティ、メンタルヘルスにかかわる心理学研究
3	発達と社会的行動	萩原俊彦☆	自己形成、進路選択、動機づけ、学習に関する心理学的研究
		福野光輝	対人葛藤の社会心理学
		井川純一	産業・組織心理学、社会心理学領域全般
4	日本社会の変化とライフスタイル	神林博史☆	日本社会における不平等 (職業、学歴、ジェンダー、家族など)
		仙田幸子	現代日本社会における家族・人口・就業
5	学びと教育の文化	原 義彦☆	生涯学習、社会教育施設 (公民館等)、まちづくり、地域学校協働
		大迫章史	子どもの学力や学校のカリキュラムなどから現代の学校教育を考える
		清水貴裕	学校やコミュニティにおける心理支援
6	さまざまな人間の成長と支援	泉山靖人☆	学校教育と生涯学習に関わる社会制度、学びの情報基盤
		平野幹雄	臨床発達学 (発達障害児、震災後の気になる子の理解と心理的な支援、特別支援教育)
		坪田益美	シティズンシップ教育論、多文化教育、社会科教育、多文化共生に向けた課題に関する研究
7	運動のメカニズムとコーチング 運動・生活習慣と健康	吉田雄大☆	スポーツのパフォーマンス分析 (運動学的分析、トレーニング分析、ゲーム分析)
		穴戸隆之	学校現場における体育・スポーツ教育学的課題解決、脳認知科学
		坂本 譲	運動・ストレス・生活習慣と健康、免疫 (運動免疫学、健康科学的探求)
8	文化のしくみと解析	信太光郎☆	近・現代の哲学思想、生命、技術、言葉、芸術をめぐる問い
		井上正子	フェミニズム、ジェンダー、クィア批評 (文学や映画等の表象文化における性、身体、装い、境界、暴力等)
		宮本直規	映画、フランス語、言語学
		文景楠	西洋古代哲学史、英米圏の現代哲学 (言語哲学、存在論、行為論など)
9	中韓の言語文化	城山拓也☆	中国語圏の近現代文学・文化
		塚本信也	中国文化論 (文学、語学、歴史、神話、芸能など)
		楊世英	中国語学および日中両国における社会構造変化
		松谷基和	韓国・朝鮮の歴史と政治、朝鮮半島をめぐる国際関係
		金永昊	韓国文学・文化
10	ことばと社会	佐藤真紀☆	日本語教育、バイリンガル教育、多言語多文化共生、実践研究
		房賢嬉	日本語学、日本語教育
		李承赫	アイデンティティと国際政治、多文化共生における諸問題
11	ヨーロッパの言語文化	翠川博之☆	フランス文学、フランス文化、表象文化論、批評理論、文学理論
		佐伯 啓	レトリックと言語教育、ドイツの言語と文化、引用句研究
		フリックウルリッヒ	歴史学、東アジアとドイツの文化とその比較
		巖谷陸月	芸術論 (西洋美術史・20世紀の芸術)、イタリア文化
		今井奈緒子	芸術論 (西洋音楽史/キリスト教音楽の歴史)、音楽表現、J.S. バッハ

チームテーマ番号、チームテーマ		担当者（☆はコーディネーター）および指導可能テーマの一例	
12	言語の分析と応用	坂内昌徳☆	第二言語習得研究、英語教育
		岸浩介	英語や日本語を対象とした統語論および意味論
		金亨貞	韓国語学・韓日対照言語学（統語論及び意味論）、韓国朝鮮語教育論
13	情報科学の基礎数学	佐藤篤☆	離散的な幾何学とその応用
		石田弘隆	代数多様体に関連する幾何学とその応用
14	情報科学と現象の数理	岩田友紀子☆	確率論・実解析・関数解析など解析学全般
		星野真樹	微分方程式および関連する解析学とその応用
		片方江	複素解析学および力学系（微分方程式・差分方程式）
15	情報科学と生命のメカニズム	松尾行雄☆	音響情報処理とその応用に関する研究
		土原和子	生物における情報の受容機構の解明・ゲノム情報解析
		牧野悌也	生き物の情報処理メカニズムの解明とモデル化
16	コンピュータシステムの構築	菅原研☆	うごくものをみる、かんがえる、つくる
		武田敦志	生活を支える情報処理システムの設計と開発
		松本章代	知的でユニークな教育システムの開発・運用・評価
17	情報技術を活用した社会の課題解決	高橋秀幸☆	IoT（Internet of Things）システムの設計と開発
		坂本泰伸	インターネットを活用したソフトウェアシステムの設計と開発
		村上弘志	天文学に関連した教育用・研究用アプリケーションの開発
18	地域の経済と文化	柳井雅也☆	少子高齢化社会における地域経済の活性化について
		岩動志乃夫	地域資源を活用した産業振興と地域形成に関する地理的研究
19	地域のまとめりとゆらぎ	遠藤尚☆	変動する社会経済状況下における地域の生活と文化の諸問題
		佐久間政広	農山漁村の地域社会における諸問題
20	少子・高齢社会と福祉	菅原真枝☆	高齢者福祉や障害者福祉を中心とする事例分析と社会学理論の検討
		大澤史伸	NPO（非営利組織）のマネジメント
		増子正	地域が抱える福祉課題の分析と、課題解決のシステムを考える
21	健康とスポーツの科学	天野和彦☆	地域スポーツをマネジメントから考察する
		高橋信二	こころと身体に良い運動の研究
22	自然資源の保全と地域マネジメント 人の暮らしと自然環境	和田正春☆	市民力を活かす地域マネジメントの構想と実践の研究
		目代邦康	地学的自然遺産の評価と保護・保全のあり方を考える
		伊藤晶文	地域の自然環境（主に地形）をとらえ、人間社会とのつながりを考える
		柳澤英明	地域づくりから災害に強いまちづくりを考える
23	情報技術と社会	杉浦茂樹☆	利用者中心のサーバーの企画・設計・構築・運用
		鈴木努	社会ネットワーク論、社会運動論
		伊藤則之	教育や業務を支援するアプリケーションの開発および実用化
24	メディアの文化と産業	小林信重☆	メディア論、情報社会論、ゲーム研究
		アンドリュースデール	ファン・スタディーズ、サブカルチャー研究（民俗学・人類学）

チームテーマの解題と担当教員

注意：各解題の下欄に掲載した推奨論文は、テーマ解題を作成した教員ら（☆は、コーディネーター）が、それぞれのテーマに関連して皆さんの参考になると評価した先輩の論文の一部です。論文を読みたい場合は、各教員の研究室を訪ねてみてください。末尾の数字は卒業年度を表します。

1. 適応行動の認知的メカニズム

櫻井 研三☆ 加藤 健二

人間は、刻々と変化する環境の中で適応的に活動するための極めて巧妙なしくみを備えており、それらを用いてより快適に生活しようとする志向性を持っている。「適応行動の認知的メカニズム」チームでは、こうした適応行動を支えている機序のうち知的側面・認知的側面に焦点を当て、主として心理学実験の手法を用いて明らかにすることを目指す。以下に各教員の主な指導内容を紹介する。

加藤は、同じものを食べても誰とどこで食べるかによって感じられる「おいしさ」が異なるのはなぜか？記憶が変容してしまうのは何故か？など、ありふれた日常生活の背後で働く認知的メカニズムを、心理学実験や質問紙調査等を通して解明する方法について指導する。

櫻井は、単一の外界事象が引き起こす複数の異種感覚情報がどのように統合されるのかという問題に着目し、複数の感覚情報が統合されて自己と外界の安定した知覚が成立する機序を、心理物理学的手法で解明することを目指す。

総合研究は、必修の授業として教員の指導を受けるということ以上に、学生自身の大学での学修を総合するという重要な意味を持っている。自ら選択したテーマに主体的、積極的に取り組むことを期待したい。研究の内容以上のものを得られるに違いない。

推奨する総合研究論文

- 1 「容器の縁の厚さが飲料の味覚評定に及ぼす影響」(峰岸美里, 2021年度)
- 2 「非利き手による食具使用のトレーニング効果と味覚認知の関係について」
(高杉拓瑞, 2020年度)
- 3 「変化検出を速くするための方略の検討」(小白晴陽, 2019年度)
- 4 「方向感覚の持続時間」(佐藤千帆, 2019年度)

2. 心身の健康と行動

金井 嘉宏☆ 東海林 渉 白倉 瞳

心身の健康と行動は、個人のパーソナリティ、認知的特徴、ストレス、対人関係、ライフイベントなど多くの要因を介在して密接に関係しており、これらは人間の適応状態や発達・成長に影響を及ぼしている。このチームでは、3名の教員が心理学の立場から適応や発達・成長に関する観点を踏まえながら、心身の健康と行動をめぐる問題について検討する。

白倉は、感情やパーソナリティと行動や適応問題との関連、またその背景にあるメカニズムについて、臨床・感情・人格心理学の観点から検討する。

金井は、社会生活の中で生じる不安や抑うつ、ストレスなどに関わる問題について、臨床心理学、特に認知行動療法の立場から検討する。

東海林は、病いや障害をめぐる語り、健康状態の維持と改善/悪化に関する行動、周囲の肯定的/否定的サポートについて、臨床・健康・医療心理学の観点から検討する。

総合研究は、教員チームによる指導というだけでなく、学生自身の大学での学修を総合するという意味も持つ。これまでの学修をもとに、各自が自分の関心に応じて、文献検索と先行研究の検討を経て研究課題を設定し、実験や調査による実証的な分析を行って論文にまとめる作業は、厳しいものではあっても、人間への考察を深め、今後に必要な力を育むための機会となるだろう。

推奨論文：

- 1 「ADHD傾向の二次障害を示す大学生に対するセルフ・コンパッション介入の効果検討」
(加賀屋咲楽、令和5年度・優秀論文賞受賞)
- 2 「大学生の主張性が内的適応および外的適応に及ぼす影響
—評価懸念を調整変数として—」(長濱 椿、令和5年度・チーム賞受賞)
- 3 「学習様式の違いとテスト様式の一致不一致が成績に与える影響
—紙と電子媒体の比較—」(栗原 萌、令和3年度・学部長賞受賞)

3. 発達と社会的行動

萩原 俊彦☆ 福野 光輝 井川 純一

人間の心と行動は、その成長とともに、またそれをとりまく社会環境に大きく影響を受けながら形成されていく。その意味で、人間を知ろうとすれば、発達的および対人的な視点は欠かせない。「発達と社会的行動」グループでは、人間の心と行動をこうした観点から理解することを目指す。

井川は、仕事への動機づけや消費行動、リーダーシップ、集団意思決定、職場のメンタルヘルスなどの産業・組織心理学における基本的なトピックに着目し、心理学的視点から産業社会の構

造や人々のところについて検討する。

萩原は、履修生にとって当事者性の強い自己形成にまつわる諸問題（例．友人関係や恋愛、親子関係、学習と動機づけ、進路選択など）について、おもに発達心理学の視点から、それらの問題にかかわる行動と心理過程を検討する。

福野は、対人葛藤や謝罪、交渉、公正感、利他性、道徳性など、広い意味で利害や価値観の不一致とその調整に関わる現象をとりあげ、その際の人々の行動と心理過程の解明を、社会心理学の理論と方法を用いて検討する。

総合研究は、学生自身の大学での学修を総合する意味を持つ。これまでの学修をもとに、先行研究の探索・検討を経て研究課題を設定し、実験や調査による実証的な分析を行って論文にまとめる作業は、厳しくはあるが、人間への考察を深める。また、自ら手を動かし他者と関わりつつ研究を遂行する主体となる経験は、社会に出てから必要な力を育む機会ともなるだろう。

推奨論文

1. 郷家慎一（2015年度）．職業選択不安と情報収集行動の関連
—認知的方略による違い—（2015年度学科長賞受賞）
2. 佐藤 武（2021年度）．社会的手がかりの共有の有無が自我理想の形成に与える影響
（2021年度優秀論文賞受賞）
3. 加藤祐人（2023年度）．関係価値は戦争中の国に対しても寛容な態度を促進させるのか
（2023年度学科長賞受賞）
4. 小林尚樹（2023年度）．孤独感は利己的行動を促進するか：気分と受け手の所属集団が
独裁者ゲームの分け手の行動に及ぼす影響（2023年度優秀論文賞受賞）

4. 日本社会の変化とライフスタイル

神林 博史☆ 仙田 幸子

日本社会は科学技術の発達、人口減少とその年齢構成の変化、および経済のグローバル化の進展に伴って、社会組織から個人の日常生活に至るまで急激に変動してきている。こうした変化は、人々の行動や意識として表れるライフスタイルに大きな変化を及ぼしてきた。「日本社会の変化とライフスタイル」チームは、このような社会変動とライフスタイルの関わりを多角的に検討することを目指す。

神林は、現代日本社会におけるさまざまな不平等に注目する。具体的には、収入、ライフスタイル、職業、学歴、ジェンダー等の不平等の実態とその形成メカニズムが中心的な問題関心となる。

仙田は、現代社会における家族とジェンダーの様相に注目する。具体的には、非婚・晩婚化の様相、少子化の様相、性別役割分業の様相、性の多様性の様相などを量的・質的データから描き出す。

推奨する総合研究論文

1. 「学力格差に対する社会関係資本の影響」(菅原香帆、2019年度)
2. 「就職活動において学生は企業の両立支援制度をどの程度重視するか」(後藤美悠、2019年度)
3. 「ダブルケア問題の背景
—家族ライフサイクルの変化と家族意識の変化から—」(杉森由芽、2020年度)

5. 学びと教育の文化

原 義彦☆ 大迫 章史 清水 貴裕

私たちの社会では学びの文化を発展させてきた。その中で学校という社会システムが構築され、より多くの子どもが教育を受けられる社会になってきた。しかし、生涯学習の理念の普及とともに、学びの文化に変化が生じている。様々な活動が学びの対象とされ、生きがいや他者とのコミュニケーションが学びの目的となった。また、まちづくりや地域づくりのための学びや、キャリア開発のための学び直しの文化も育ちつつある。学びの形態も、先生から生徒への一方向的なものから、学び合いが重視されるようになり、近代以降教えの文化を育ててきた学校も、学びを重視した文化を創造しつつある。

このグループでは、学校の学習活動や趣味、ボランティア活動などの活動、そしてそのような学びを成立させる集団づくりなど様々な活動の中で育まれてきた学びの文化に焦点をあて、それがどのような変化を遂げてきたのか、変化の社会的な背景は何か、現代社会において学びの文化がどのような役割を果たしているのか、あるいは、学びの文化を育てるにはどのような仕組みや取組が必要かなどについて検討する。

推奨する総合研究論文

1. 「防災・減災の日常化を図るための地域防災学習の考察」(長谷川光、2017年度)
2. 「大学生のアルバイト経験が進路選択自己効力に与える影響」(高橋和、2018年度)
3. 「学童保育職員におけるストレスとコーピングに関する研究」(安倍瑞生、2019年度)
4. 「特別な支援を必要とする学習者を対象とした協同学習のあり方についての検討」
(長澤雄斗、2019年度)
5. 「心の硬さといじめの加害者経験の関連について」(中沢穂乃、2019年度)
6. 「ゼミが自己成長感に与える影響」(佐藤初姫、2019年度)
7. 「自分と相手に対する「甘さ」—甘い香りを用いたプライミング効果—」(渡邊綾香、2020年度)

6. さまざまな人間の成長と支援

泉山 靖人☆ 平野 幹雄 坪田 益美

「子どもが大人になる」「人が何かを学ぶ」というプロセスは社会の中でどのような意味を持ち、またそのプロセスの中では人にどのような変化が起きているのであろうか。

私たちは、家庭においては親や兄弟姉妹と、学校においては教師や友人と、社会においては職場や地域関係など多様な人間関係を営み、その影響を受けながら心身を発達させていく。私たちを取り巻く現代社会は、急速にグローバル化・情報化・少子高齢化を進めている。その影響は、子どもの具体的な成長の場である家庭や学校、地域社会にも及び、例えば経済格差と学力格差、多様な人びとが含まれ、また参加できるコミュニティの形成、国際レベルでの学力観の標準化、アクティブラーニングなどの学びの手法の転換等、さらには多様な課題に向き合える力量の形成など、新たな諸課題が生ずるようになった。

総合研究では、人間の成長とその支援にかかわる諸課題、そして私たちの成長を支える場である家庭、学校、社会にかかわる諸課題といった幅広い領域から、学生各自がこれまで学習してきたことを基に具体的な研究課題を設定する。関心領域の文献検索、先行研究の検討、文献資料の読解を通して、あるいはフィールドワークや調査・実験などによって、研究を深め論文にまとめていく。また3回を予定している総合研究発表会等の交流の機会も生かしてほしい。実りある研究成果が数多く出てくることを期待したい。

推奨する総合研究論文

1. 「学童保育職員におけるストレスとコーピングに関する研究」(安倍瑞生、2019年度)
2. 「知的障害のある同胞を持つきょうだいの心理的負担に対する支援の現状と課題」
(佐藤由美子、2022年度)
3. 「生涯学習を阻害する要因と改善についての考察」
「一公民館における表現の自由に着目して一」(大山詩織、2019年度)
4. ダイバーシティ実現に向けた中学校における性教育の必要性
「多様な性」に焦点を当てて一(伊藤隆祐、2019年度)

7. 運動のメカニズムとコーチング

運動・生活習慣と健康

吉田 雄大☆ 穴戸 隆之 坂本 譲

運動は、健康の維持増進、競技スポーツにおけるパフォーマンス向上を目的として行われる。一方で、教育活動や競技スポーツにおけるコーチングなど、運動を指導する場合もある。「運動の

メカニズムとコーチング」グループでは、運動中の生理的応答や動きなどの運動のメカニズムを運動生理学的実験や運動学的実験により明らかにすることを旨とする。運動の指導法やコーチング法を学び、時にはICTを用いながら指導における実践的研究を行う。

また、運動は健康との関連することが知られている。運動は食事、睡眠などの生活習慣のひとつであるが、運動や生活習慣と健康との関わりについて探求する。ここでいう運動はスポーツ活動だけではなく、日常的な人間の活動（身体活動）全般を意味する。食事、睡眠だけではなく我々の日常には様々な生活習慣があり、健康と関わるであろう生活習慣すべてが対象となる。一方、健康は、身体健康、心の健康、社会健康がある。生活習慣が人間の身体や心に及ぼす影響を見ることは我々の大切な課題でありその生活習慣を支える社会環境に目を向けることも課題となる。

推奨する総合研究論文

1. 「体力要素と技術要素がスプリント能力の変化に及ぼす影響」(渡部さやか、2020年度)
2. 「高強度インターバルトレーニングが運動後過剰酸素摂取に及ぼす影響」(高坂直樹、2020年度)
3. 低温環境下と常温環境下におけるスロージョギングが及ぼす身体的疲労度並びに心理的影響」(西島海、2018年度)
4. 「高校生フェンシング選手のストレス反応とストレスコーピングの関連：競技成績停滞をストレスサーとして」(星野祐介、2019年度)
5. 「運動が首尾一貫感覚(SOC)に及ぼす影響」(三浦はるか、2019年度)

8. 文化のしくみと解析

信太 光郎☆ 井上 正子 宮本 直規 文 景楠

「文化」とは何だろうか。きわめて多様な意味で用いられる言葉である。一般的には、人間の生活様式の全体、あるいは、人間が作り上げてきた有形・無形の成果の総体が「文化」と呼ばれる。

よく似た意味の「文明」という言葉と比べてみよう。文明が「四大文明」「機械文明」「物質文明」など、人間の知識や技術が向上することにより便利になった人間生活のあり方を指すのに対し、文化は「縄文文化」「日本文化」「東西文化」など、地域や時代に根ざした形で人間精神が生み出したものの全体を意味する、と言える。

私たちが取り上げようとするのは、後者の「文化」である。ある歴史家によれば、文化には、娯楽・ファッション・ライフスタイル等、衣食住を中心とする「ソフトな文化」と、言語・宗教・道徳などの「ハードな文化」の、二つの側面が存在する。ソフトな文化は産業化や情報化によって大きく変わっていくのに対し、ハードな文化は時代が移っても比較的ゆるやかにしか変わらない。

ソフトな文化であれハードな文化であれ、それがどのようにして生まれるのか。また、文化が人々に受容され広まる、あるいは逆に、それが放棄され廃れるのは、どのようにしてか。こうした文化のしくみについて考察し、それを論文という形にまとめ上げること、これが本チームの課

題である。

推奨する総合研究論文

1. 「女性の美醜を決めるのは誰か」(河東美紗樹、2020年度)
2. 「AI美空ひばりとイタコ」(三浦範子、2020年度)
3. 「日本社会における女性間の友人関係～女友だちを巡る小説の考察～」(吉田杏佳、2021年度)
4. 「家族がもたらすもの～ひとりで死ぬということ～」(佐藤瞳、2021年度)
5. 「小説『82年生まれ、キム・ジヨン』におけるジヨンの苦悩と男性精神科医の役割」
(阿部花音、2022年度)
6. 「柳宗悦の朝鮮理解—複合的な思想形成を辿って—」(大友みのり、2023年度)

9. 中韓の言語文化

城山 拓也☆ 松谷 基和 金 永昊 塚本 信也 楊 世英

中国は、西方の異文化の影響や北辺の遊牧民族の圧迫を絶えず受けながら、有史以来独自の文明圏を形成し、持続的な展開を遂げてきた。朝鮮半島及び日本は、その強い影響下にありながらも固有の文化を育んできた。こうした中国を核とする東アジア文明圏は、漢字、仏教などを共通の基盤として、伝統文化を形成してきた。しかしその伝統ないし体制は、西欧近代の成立によって変更を余儀なくされ、困難な近代化の過程を強いられることになる。

本チームでは、伝統のみならず、近代以降、さらに劇的な変化をとげる現在の東アジア情勢をも等しく視野に入れながら、言語や文化、思想、芸術から風俗や生活習慣にいたる多様な文化の諸相、また経済発展や環境問題、国際協力など今日的なグローバルな諸課題を考察の対象として取り上げる。具体例を挙げれば、中国語や韓国・朝鮮語文化圏における服飾や文化の変遷や言語上のジェンダー差別表現などに着目し、その歴史的背景を考察したり、あるいは少子高齢化社会のもたらす社会・経済的インパクトを地域間の比較も視野に入れつつ分析したりすることが可能であろう。

このようにアプローチの対象は、それが研究課題として成り立つ限り、それぞれの問題関心の所在に応じて自由に選択されてよい。また文献資料に限らず図像資料の解読、統計資料の活用なども有効な方途となろう。東アジアを対象とする個別具体的な課題の探求を通して、文化や異文化交流の深層に触れ、各国各民族の相互の相対化と共生の可能性を探求することこそが、本チームの最終的な目標である。

推奨する総合研究論文

1. 「張愛玲作品にみる母娘関係—「金鎖記」と「留情」—」(菅野由衣、2022年度)
2. 「抗日運動家・羅喆と「親日」行為—国家神道体制下での檀君教存続への戦い—」
(高山真結、2022年度)
3. 「小説『民族の罪人』から見る蔡萬植の反省と弁明」(佐藤友咲、2023年度)

4.「東北帝大での留学経験が金起林の漢字廃止論に影響を与えた可能性

—カナモジカイを中心に—」(高橋由惟、2023年度)

5.「“V 過来”の派生義におけるVの属性」(佐藤愛海、2023年度)

10. ことばと社会

佐藤 真紀☆ 房 賢嬉 李 承赫

ことばは社会を映す鏡だと言われることがある。なぜなら、社会の構造が私たちのことばの選択に影響を与え、また私たちのことばの選択が社会の構造を維持したり変えたりする側面があるからである。

本チームでは、ことばと社会がどのように影響し合っているか、異なることばが国と国の間の相互理解にどのように影響し合うのか、また、ことばの教育や学習がどのように社会と繋がっているのか、などの課題に取り組みたい。研究の方向性は二つある。一つは、私たちが普段なにげなく使ったり見聞きしたりしている言語表現に意識を向け、そこから社会の何が見えるかを考える、もう一つは逆に、社会の現状からスタートし、それがどのようにことばに反映されているかを見る、という方向である。また、この両方向を行き来しながら研究を深めることも可能であろう。題材としては、性別や世代の違い、人種や民族の違い、国や文化の違い、ウチソトや上下関係、社会的格差、権力構造などは研究対象になりやすいと言えるが、もちろんこれらに限定しない。また、多様な言語文化背景を持つ人々を知り、共生のあり方を考えることや、そのためのことばの教育を考えることも対象になる。さらに、ことばに付随して使用される視覚表現(写真や映像など)も分析対象に含めてよい。

推奨する総合研究論文

1.「ベトナム語母語話者による日本語発音協働学習の試み」(齋藤ゆみ乃、2017年度)

2.「若者言葉における『しんどい』の新しい使用実態」(齊藤碧、2021年度)

3.「戦争花嫁と混血児たちが受けた偏見と差別～現代のハーフの生きづらさを映し出す～」

(永倉優大、2023年度)

11. ヨーロッパの言語文化

翠川 博之☆ 今井 奈緒子 巖谷 睦月
佐伯 啓 フリック ウルリッヒ

ヨーロッパの文化は、ファッションからスポーツ、生活スタイルにいたるまで、いろいろなかたちで私たちの日常に溶け込んでいます。とりわけドイツとフランスの文化は、高等教育機関における言語教育の伝統と結びつき、私たちの精神的活動にたいへん大きな影響を与えてきまし

た。そうした多種多様な影響そのものが、それぞれ興味深い研究主題になることでしょう。

「ヨーロッパの言語文化」をテーマとするこのグループでは、ドイツとフランスを中心に広くヨーロッパの文化事象を研究対象としています。特に「表現と文化」という観点から、音楽、美術をも含むあらゆる表現行為を通じて、人間の創造活動やそれを育んだ文化的背景を考察していきます。「表現」がどのように人々の思想や感情を映し出し、時代や社会を超えて共鳴していくのか、その諸相を掘り下げてみましょう。また表現が生み出す総体を「文化」と捉え、表現行為の背景をなす生活様式や精神的土壌について理解を深めることも課題になります。

具体的アプローチとしては、文学作品・芸術作品の研究、言語表現の分析、社会・風俗・習慣にまつわる考察などが考えられます。歴史的な関わり、地理的な隔たりを考量した日欧の文化比較をそこに含めることもできるでしょう。課題への取り組みを通じてヨーロッパの学芸・文化を探究し、深い洞察を得ることを目指します。

推奨論文

「駐輪場をより使いやすく、楽しく駐める空間にするために

—自転車先進国ドイツ・オランダから学ぶ（中津山温大、2023年度）

「ラシルド『MonsieurVénus』における「反自然anti-nature」」（小国鈴、2022年度）

「宮崎駿アニメのドイツにおける受容」（目時杏奈、2022年度）

12. 言語の分析と応用

坂内 昌徳☆ 岸 浩介 金 亨貞

本グループが扱う主要な領域は、言語の分析と応用、つまり言葉に対してどのような分析が可能か、コミュニケーションの道具としてどのように働いているのかといった問題や、母語の獲得や第二言語習得（獲得）の問題などを扱う領域です。

言語は、音声と意味の2つの側面を持ち、また、その構造も語・文・談話といったレベルの違いが存在します。どのような側面から研究するかによって音声学・形態論・統語論・意味論などの分野に分かれます。

また、発話の状況を含めて意味を考えると、語用論と呼ばれる分野があります。最も広い意味で文法を考えると、「文法」は上で述べた言語の構造をすべて含みます。

それぞれの分野で提案されている理論はひとつとは限りませんが、どのような理論であれ、総合研究では、それに何か新しい見方や観察、証拠などを付け加えることが目標です。言語の構造は複雑ですから、いろいろな見方や分析が可能です。

推奨する総合研究論文

1. 「同格名詞節を導く接続詞thatの省略に関する再考：

英語母語話者の直観的判断を通して」（大和田拓弥、2014年）

2. 「継続アスペクトの日英韓比較

—日本語母語話者の英語・韓国語習得の観点から—」（千葉絵里子、2016年）

3. 「分離CP仮説と素性照合理論に基づく日本語のかき混ぜ構文と後置文の分析」
(及川健弥、2017年)
4. 「韓日対訳小説における「オノマトペ+する」と「オノマトペ+하다 (hada)／
거리다 (georida)／대다 (daeda)／이다 (ida)」の対応関係」(今野香菜子、2018年度)
5. 「日本語母語話者の韓国語の結果状態形(-아/어 있다)と
完了形(-았/었)の習得について—瞬間動詞を中心に—」(鈴木唯、2021年度)

13. 情報科学の基礎数学

佐藤 篤☆ 石田 弘隆

情報科学に関する技術の進歩とその応用の可能性は、コンピュータの能力と共に日々進化している。その基礎として、また今後のさらなる発展を支えていくものとして、数学および数学的な思考方法がある。古典的な代数学、幾何学、解析学、集合論、数理論理学といったものにとどまらず、グラフ理論や暗号理論・符号理論から数値解析に至るまで、数学と情報科学との結びつきは深いものがあり、それらを理解することは情報科学を理論の面から進化させていく上で欠かすことができない。

このテーマでは、情報科学の基礎としての数学を基本的な立場から学ぶ。取り上げるのは「数え上げ組合せ論」「代数幾何学」「離散的な幾何学」といったトピックや、それらの応用である。また、コンピュータを利用して数学的な抽象概念をコンピュータグラフィックスの形で可視化することも目指す。さらに、数学教育の現状についての検討も積極的に行い、どのような教育が求められているかについて考えたい。

教員免許状(中学校・高等学校数学)の取得と共に実際に教職に就くことを目指す上で、数学的な知識を身につけることと、人に伝える能力を身につけることは必須条件である。卒業課題の研究においては、それらのことも十分に考慮される。

推奨する総合研究論文

1. 「ベズーの定理とその応用」(工藤麻祐子、2019年度)
2. 「ベルヌーイ多項式とべき和の公式」(板橋ゆかり、2020年度)
3. 「結び目の表示と結び目の不変量について」(牧野慎太郎、2020年度)
4. 「ワイルの一様分布定理について」(日下部雄仁、2021年度)
5. 「3元BCH符号とその復号について」(松崎佳花、2022年度)
6. 「群の作用と軌道の数え上げ」(松本那奈、2022年度)
7. 「有限体における1の冪根と平方剰余」(菊池亜美、2023年度)
8. 「グラフの彩色多項式とその計算について」(佐々木快、2023年度)

14. 情報科学と現象の数理

岩田 友紀子☆ 星野 真樹 片方 江

自然科学においては、どの分野に限らず「どうなっているのだろう」「なぜだろう」という疑問を持つことが始めの一步です。この疑問を問題として表現し、さらに解決に至る有力な方法を提供するのが数理科学です。「情報科学と現象の数理」では、そのような数理科学の方法のおもしろさと有効性を学習します。学生が、解決の糸口となる基礎的な理論や技法を学び、自ら解決の道を切り開いていくことができるよう、教員は助言や指導を行います。

数理科学の方法の有効性を最も明瞭に示すのが数学です。われわれは、パズルや数学の基礎的な問題を通して、その力の根源に迫ります。また、自然界の現象が数理科学の言葉で表現され、理解できることも学びます。

課題の具体例として、次のようなものがあります。

(1) 数学の基礎理論と応用

数学における様々な分野から興味ある話題を選び、基礎的な理論を習得し、その応用を試みる。教科書の輪読と討論を行い、理解を深める。

(2) 数学の諸問題のコンピューターを用いた取り扱い

定理として得られた諸結果やその具体例等について、コンピューターによる可視化を試みる。また題材に応じて実際の現象を数学的に解釈し、Mathematicaなどの数式処理ソフトなどを用いて、そのシミュレーションについて考察する。

推奨する総合研究論文

1. 「熱方程式の自己相似解による解の漸近挙動解析」(高橋志光, 2019年度)
2. 「ウイルス感染の数理モデル」(狩野沙耶佳, 2019年度)

15. 情報科学と生命のメカニズム

松尾 行雄☆ 土原 和子 牧野 悌也

情報を「特定の機能を発現するシステムの状態・行動を決定するために必要なモノ」と定義する。そうすると、生命はその誕生と同時に「情報」を生みだし、その進化の過程で様々な形態の情報処理能力を発展させてきた、と捉えることができる。生命を理解することは、地球上で最も長い歴史と優れた柔軟性を持つ「情報処理システム」を理解することに他ならない。本グループでは生命の情報処理のしくみについて、感覚受容(土原)、脳神経系(牧野)、計算アルゴリズム(松尾)を中心テーマとして研究をおこなう。

土原：

我々ヒトも含め生物は、日々環境から情報を受容しており、そのための感覚器を持っていま

す。目で見、匂いをかいで、触ってみて、味わう。これらはすべて感覚器で行っています。受容される物質の方は、情報伝達物質といいます。研究室では主に昆虫を使って、機械受容（気流、音等）、化学感覚（味覚、嗅覚等）受容の研究を、行動と分子サイド（遺伝子やタンパク質）からおこなっています。ここでは、実際に生き物を使って、どのように情報伝達物質を認識しているのかを解明していくことを目的とします。

推奨論文

「ジャコウアゲハの成長に及ぼす要因～栄養～」(芳賀祐輔、2018年度)

「カイコの音受容に関わる遺伝子の同定

～糸状感覚子による音受容システムの解明～」(内田尚希、2022年度)

「空気刺激に対するアリの反応性」(日野郷志、2021年度)

牧野：

生き物の活動には人の好奇心を駆り立てる面白さがあります。一方で、生き物の仕組みはたとえそれが単細胞生物であっても大変複雑で、生き物の面白さを理解するには複雑な現象を簡単な形に整理する力が必要です。ここでは、ヒトや動物の感覚情報処理・運動制御に関わる観察や実験、あるいはモデル化を行うことで、生き物が柔軟に活動する仕組みを明らかにするとともに、複雑な現象を理解する力の獲得を目指します。

推奨論文

「スニッフィングの匂い情報表現へ及ぼす影響」(佐藤将太、2015年度)

「単純図形の組み合わせが生み出す印象」(佐々木航、2018年度)

「コンピュータゲームはどこへ向かうのか ～『遊び』という視点からの分析～」

(星海舟、2020年度)

松尾：

人は音を聞くことによって音声を認識し、音源がどこにあるかを知覚しています。また、イルカやコウモリは音を自ら出し、対象物から反射してきたエコーを聞くことによって、3次元空間を知覚しています。しかし、音がどのように処理され知覚されているかは、未だ解明されていません。ここでは心理物理実験や計算機を用いた解析により、これらのメカニズムを理解し、応用していくことを目的とします。

推奨論文

「広指向特性超音波を用いた人検知」(星友也、2015年度)

「発声方法と歌真似が歌唱評価に与える影響」(村澤一実、2016年度)

「周波数帯域の時間反転が音声明瞭度に与える影響」(菅野絵莉、2017年度)

16. コンピュータシステムの構築

菅原 研☆ 武田 敦志 松本 章代

コンピュータシステムは生活を便利にするツールであり、私たちの日々の生活に欠かせないものとなっています。

コンピュータシステムの構築を通じて、情報科学の基礎理論や情報システム開発技術の研究、機械と人間が連携して作業する仕組みについても研究していきます。調査や実験ならびにその解析に関する技を習得すると同時に、研究成果の発表方法（論文執筆やプレゼンテーションの方法）についても深く学習していきます。

主な研究分野は人工知能、機械学習、教育支援、ロボティクスなどとなっています。

推奨する総合研究論文

1. 「ニューラルネットワークを用いた音楽データの楽器分類手法」(佐藤佑樹、2017年度)
2. 「日本語を対象とする感情を考慮した対話応答生成」(本間心、2019年度)
3. 「自己駆動力をもたない単純なロボットの集団による物体搬送」(鈴木沙代、2019年度)
4. 「一人暮らしの学生を対象とした防災対策を促す地震体験VRアプリの開発」
(三浦太輔、2021年度)
5. 「外国語会話訓練を目的とした動画配信システムの開発」(横山侑紀、2022年度)
6. 「視覚支援学校におけるプログラミング環境の改善」(高橋凌人、2022年度)

17. 情報技術を活用した社会の課題解決

高橋 秀幸☆ 坂本 泰伸 村上 弘志

この総合研究では、生活や教育、地域コミュニティなどの多様なフィールドに潜在する課題について「情報技術の活用」を通じて実践的手法によって解決していくことをテーマの主題とします。高齢化社会への対応、防災や減災の推進、天文学を中心とした小中学校での教育など、幅広い対象がテーマに含まれます。

社会の課題解決には、単に情報システムを開発するだけではなく、課題の発見や把握、調査や分析、解決策の提案といったように、一連の取り組みを進めることが求められ、この一連の課題解決の流れに情報技術の活用を積極的に図ることで、問題解決の促進が期待できます。

研究では、情報技術に関する学習を進めながら、受講生の意思を尊重しテーマやフィールド、チームなどを決定して進めていきます。また、受講者には、領域横断的な活動を推奨しますが、一つの領域に特化した研究を進めることも可能です。実効性があり、成果を意識した取り組みを期待します。

推奨する総合研究論文

1. 「GPSトラッカーを用いた人流調査システムの開発と評価」(須藤孔生・村田京介、2023年度)
2. 「ボランティアマッチングシステムのアカウント機能及びボランティア依頼機能の
テスト開発と評価」(鎌田夏鈴・菊池天希・須東未羽・桔梗華衣、2023年度)
3. 「宇宙科学衛星データを用いた動機づけ型Python教材の作成」(小嶋隼弥、2023年度)
4. 「星野写真収集による限界等級マップ製作システムの開発」(佐藤大文・阿部聖斗、2023年度)
5. 「小型ドローンによる平時と有事を考慮した屋内巡回システムの研究」(谷田言、2023年度)
6. 「トイドローンの連携による動的な接続切替制御機能に関する研究」(渡邊滯月、2023年度)

18. 地域の経済と文化

柳井 雅也☆ ^{いすぎる}岩動 志乃夫

今日の地域社会には多くの課題が山積しており、中でも経済的な課題は地域形成に大きな影響を及ぼす。課題となっている要因の特定および解決の提案につなげていくためには、問題を広い視野で構造的に捉え、地道で正確な調査・分析を空間的視点から行っていく必要がある。当分野では、地域に存在する幅広い課題を捉え、学生が自らの視点を活かし、課題の解決に向けて意欲的に挑戦する研究を指導していきたいと考えている。

取り上げるテーマは、経済・産業など大きなものから、個別企業、商品、祭りやイベントなど地域文化に至るまで多様であり、それをどのように考え、構築し、展開していくかについても多様な視点が要求される。学生自身の今までの学習の集大成として、自由でかつ大胆な視点から、また地域課題の縮図として、それを広く応用できるように緻密な調査・分析によって、まとめていって欲しいと考えている。

この分野を希望する学生数が多いことに加え、取り上げるテーマが多様であることから、十分な指導を行うためには、早い段階からテーマを決め、資料収集、調査などを計画的に進めていく必要がある。指導教員から十分な指導を受けるためにも、意欲的に教員に働きかけ、取り組んでいく姿勢を示して欲しい。構想発表会などの予定は、積極的にかつ早めに進め、成果が十分得られるように進める。なお各テーマについて意見が必要な場合は、直接担当教員に問い合わせていただきたい。

推奨する総合研究論文

- 1.「仙台市中心部に開業したお笑い劇場と街の賑わいの創出」(中野伸、2019年度)
- 2.「宮城県内におけるDMOの活動からみる日本版DMOの特徴と今後の展開」(及川輝、2019年度)
- 3.「地方都市の郊外団地における高齢者の買い物行動の特徴とその課題
～福島市蓬萊町を事例に～」(本田香織、2018年度)
- 4.「ふくしま逢瀬ワイナリーを事例とした6次産業化とワイン産業の実態
行政と農家が参画する取り組みの実態調査」(深澤優斗、2019年度)

19. 地域のまとまりとゆらぎ

遠藤 尚☆ 佐久間 政広

人間が生きるということは身の回りの空間に自分なりの意味を与えることであるということに

諸君は気づくだろうか。空間に与えられる意味は、一定の環境のもとで暮らす地縁集団にとっては集団的意味に転化し、それらは一定の「まとまり」をもった景観を生み出す。「地域」はこうして生まれる。それぞれの地域で、人々は自然や社会とのかかわりの中で様々な生活の知恵や人間関係、価値観を継承したり再構築したりしている。個性豊かな地域の景観はその結果でもある。

他方、現代の地域は、人口減少、高齢化、産業空洞化、公共サービスの維持困難、自然災害、そしてグローバル化の影響など、多くの不安定要素に満ちており、地域は日々変動する「ゆらぎ」の中にある。それは日本だけの現象でなく、他の国々でも変わらない。

私たちのチームでは、こうした「地域」をめぐる「まとまり」と「ゆらぎ」の諸相を、担当者の専門分野である社会学、地域文化論、人文地理学を基礎としつつ、関連分野との交流も図りながら、文献調査、現地踏査、統計分析、質問紙調査、分布図づくりなど地域研究の諸手法を駆使して、とらえたいと考えている。

推奨論文

1. 「民俗行事としてのナマハゲの現状と意義
—秋田県男鹿市宮沢町内の事例を中心として—」(加賀谷南実、2019年度)
2. 「商店街の商店組合は何のために活動するのか
—宮町商店街振興組合の事例—」(渡部樹、2019年度)
3. 「新規大卒者の就業に伴う地域移動と就業先企業選定の背景について」(富田紘平、2019年度)
4. 「福島県三春町における地域資源を活用した通年型観光の取り組みと課題」
(市川愛美、2020年度)
5. 「石巻市桃生町における茶栽培の現状と茶業展開の変容」(能登みのり、2020年度)
6. 「栗原市における地元企業による米粉菓子の商品化の取り組み」(山口紗依、2021年度)
7. 「秋田県湯沢市内中学校における修学旅行の役割の再検討
—新型コロナウイルス流行前後の修学旅行形態から—」(藤原友希、2021年度)

20. 少子・高齢社会と福祉

菅原 真枝☆ 大澤 史伸 増子 正

少子・高齢化の進展に伴い、わが国の社会福祉は転換期に直面している。「福祉」という言葉から、生活困窮者や障がい者、介護が必要な高齢者に対する支援を思い浮かべるかもしれないが、現代社会における福祉課題はこれにとどまるものではない。地域社会に目を転じてみれば、人間関係の希薄化や地域活動への参加の機会の減少により、子育てに不安を感じたり、高齢者の単独世帯の増加に伴う災害時の要援護者支援も急務である。障がいの有無に関わらず、世代を超えてすべての人がよりよい地域生活を営むための社会全体の福祉のあり方を考え直さなければならない。福祉は、社会政策によってのみ支えられているのではなく、家族や地域、企業、NPOなどの市民団体、ボランティアなど様々な社会資源によって支えられており、これらインフォーマルな活動が地域の福祉の重要な部分を担っていることを認識しなければならない。福祉をわれわれの地域生活と密接に結びつけたものとして捉え、総合的な視点からアプローチすることが求

められている。本チームでは、地域社会が抱える福祉課題について文献や資料から考察したり、実際のフィールドでの調査活動や具体的事例の分析を行う。

推奨する総合研究論文

1. 「高齢者の国内旅行が持つ可能性～高齢者の健康と地方経済活性化～」(横田遥香、2018年度)
2. 「増加する空き家が引き起こす問題～宮城県を例に解決策を見出す～」(湧口大登、2019年度)
3. 「宮城県内の地域間で生じている健康寿命の格差要因」(前野翔、2019年度)
4. 「東日本大震災から4年後の心のケアの現状把握
—宮城県石巻市を事例として」(小松準弥、2015年度)
5. 「みやぎ生協のボランティアセンターが抱える課題と対応の現状」(鈴木雄太、2015年度)
6. 「外国人労働者の地域生活のネットワーク
—名取市の老人ホームで働くEPA介護福祉士候補者を対象に」(小島沙紀、2019年度)

21. 健康とスポーツの科学

天野 和彦☆ 高橋 信二

「スポーツ」とは、固定化されたものではなく、時代、場所、歴史などにより、流動的に変動する文化の事です。特に、最近では、政治性や経済的基盤により公共の施設が民営化されており、地域で活躍するスポーツにはスポーツを通じて健康の維持増進や教育といった社会的な役割を担うことが期待されています。「健康とスポーツの科学」チームでは、受講生一人ひとりが地域で活躍できるような人材を教育することを目標としています。「健康とスポーツの科学」チームでは、上記の目標を達成するために、スポーツ活動が人々の健康に与える効果を科学的に検証するための分析方法、スポーツ活動を運営するためのマネジメントにより習得していきます。また、習得した方法を用いて活動した結果を卒業研究としてまとめる作業を通じて、受講生の論理性もトレーニングします。具体的には、①中高齢者の健康と運動処方、②スポーツ生理・心理学的研究、③プロスポーツと地域社会、④住民参加型のスポーツクラブ・イベントのマネジメントをテーマとして(①と②を高橋、③と④を天野がそれぞれ担当)、総合研究を行っています。

推奨する総合研究論文

1. 「運動部活動におけるリーダーシップに関する研究
—高等学校軟式庭球部の顧問教諭に注目して—」(窪田 陽香、2018年度)
2. 「高齢者の健康活動について(高齢者のQOLと健康について)」(佐藤 風、2017年度)

22. 自然資源の保全と地域マネジメント 人の暮らしと自然環境

和田 正春☆ 目代 邦康 伊藤 晶文 柳澤 英明

〈自然資源の保全と地域マネジメント〉

地域には、地形、気候、植生などで構成される自然的景観資源や伝統、芸術、産業などの文化的・経済的資源が豊富に存在している。本研究チームの目的は、それらの地域資源を積極的に掘り起こすとともに独自の調査・研究により多面的な評価を与え、それらを地域の持続的発展のための資源として有効活用してゆく方策を見いだして行くことにある。ここでの研究成果は地域振興に資するとともに、貴重な地域資源の保全、保護にもつながるであろう。

本テーマの目的を遂行するため、受講生は地域の自然の成り立ちを調査・研究するとともに、それらの価値を正しく評価できる知識や技法を習得すること、伝統、芸術、産業の興りや継承にかかわる知識はもちろん、地域特有の構造を学ぶことが必要となる。目代は様々な自然物のもつ潜在／顕在的価値を評価し資源として再構築する方法を、和田は各地域の自然的、文化的、経済的資源を、地域固有の持続的発展のための「仕組み」として組みあげる方法を、伊藤は地域の地形の成り立ちに関する深い理解に基づいて、適切な土地利用・開発や防・減災対策を具体的に検討する方法について指導する。

受講生のひとり一人が、調査・研究の進捗状況を互いに報告し合い、他者の取り組みにも積極的に参加することにより、実践に基づく知識と技能を身に付けることになる。

推奨する総合研究論文

1. 「過疎集落における祭りの実態と展望 大鰐町ねぶた運行を例に」(阿保里奈、2016年度)
2. 「一ノ蔵と瀬祭の比較 地方中小企業の生き残り戦略」(佐藤由佳・小田島愛、2017年度)
3. 「松島湾における2011年東北地方太平洋沖地震津波前後の砂浜変遷」(八幡恒輝、2017年度)
4. 「阿武隈川下流にみられる自然堤防地形とそれを構成する堆積物」(三上瑛二、2018年度)
5. 「地域における子ども読書推進活動のこれから—美里町近代文学館を事例に一」
(相澤葵、2018年度)
6. 「リアルと並行する作品による長期的な観光誘致」(尾形芽生、2019年度)
7. 「象潟の流れ山地形の価値の評価と保全」(想定される卒論題名)
8. 「栗駒山における登山道の保全と管理方法」(想定される卒論題名)
9. 「学校ジオトープを用いた環境学習の実態と課題」(想定される卒論題名)

〈人の暮らしと自然環境〉

地域には「自然の恵み」に応じた暮らしがあり、たくさんの「かけがえのないもの・こと」が育まれてきた。一方、洪水や土石流、台風、津波などの「自然災害」は、しばしば人命や財産を奪い、住宅地や商工業地、農地、森林といった生活や文化の基盤にダメージを与えてきた。この授業では「自然の恵みと災い」という二面性に着目し、「人と自然のよりよい関係づくり」を考究・実践する。

学修目標の達成に向けて受講生ひとり一人は、①特定の地域を対象とし、②先行研究を批判的

に読み解きながら、③自らフィールドでデータを収集し、④適切な手法を選んで、解析・考察を深めてゆくことになる。調査・研究の進捗状況を報告し合うことはもちろん、他者の取り組みにも積極的に参加することで、実体験に基づく知識と技能を身につけることができるだろう。地域の防災・復興・活性化や景観生態学・環境教育（ESD）の視点から研究指導を行う。

担当教員の都合により、両チーム合同で実施することになった。

なお内容や方法は昨年までと変わらない。

推薦する総合研究論文

1. 「SNSを活用した正確な情報取得と避難方法の確立」（工藤佑羽、2023年度）
2. 「効果的な津波防護施設のデザイン方法についての検討」（高本竜佑、2023年度）
3. 「地域建造物を保存するための3D技術の活用」（高橋 丈、2023年度）

23. 情報技術と社会

杉浦 茂樹☆ 伊藤 則之 鈴木 努

現在の私たちの生活は様々な情報技術の恩恵を受けて成立している。コンピュータ、スマートフォン、インターネット、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）といった情報技術は日常生活の一部であるとともに、学術研究の重要な基盤となっている。

「情報技術と社会」チームでは、これらの情報技術と社会との関わり方を人間科学と情報科学の両面から考えていく。人々の意識や行動は情報技術の進歩によってどのような影響を受けているのか、社会においてどのような情報技術が求められているのか、またそれを実現し人々の活動を支援していくためにどのような情報技術が可能なのか、各教員の専門分野をベースにしつつ、さらに幅広い視野から研究を進めていく。

伊藤は情報科学とくにソフトウェア開発の視点から、人間の社会活動を支援する情報技術の実現とその効果を見てゆく。特に、SNSに関連するスマートフォン用アプリケーションの開発技術、またそのアプリケーションの使いやすさや利用形態について、実際のアプリケーションを開発し、適用することにより評価・分析を行う。

杉浦は情報科学とくにコンピュータシステム構築の視点から、情報技術と人間や社会との関わりを見ていく。例えば、KinectやLeap Motionなどのナチュラルユーザインタフェースを活用したシステムの開発と評価、高齢者や障害者を支援するシステムの開発と評価、サーバのログ解析によるネットワークセキュリティの考察などの研究を行う。

鈴木は人間科学とくに社会学の視点から、社会統計学、ネットワーク分析、テキストマイニングを用いて人々の情報行動の分析を行う。また、情報技術を用いた社会学研究方法としてWEB調査、WEB実験、統計解析や情報可視化のためのアプリケーション作成などを行う。

推薦論文

「電子問診票アプリケーションの作成～医療関係者の負担軽減の実装～」(大橋穂香、2023年度)

「AI絵師に関する問題と解決策の提案」(一條義紀・伊東龍人、2023年度)

「SNSの利用動機、失敗経験とプライバシーに関する不安の関係」(日景稀璃斗、2023年度)

24. メディアの文化と産業

小林 信重☆ アンドリュース デール

現代社会に生きる私たちは、情報を伝達・保管・記録するさまざまなメディアとのかかわりのなかで生活しています。新聞やテレビ、コンピュータやインターネットのようなメディアは、私たちの生活に大きな影響を与えています。他方で、私たちの日々の営み自体が、これらのメディアの意味や用いられ方に影響を及ぼし、また新しい文化や産業を生み出しています。

本チームでは、ゲーム、アニメーション、マンガ、テレビ、映画、スマートフォンアプリなどのメディアについて調査・研究していきます。メディア作品やその作り手、受け手、作品・作り手・受け手を取り巻く社会、あるいはこれらの間の関係が、私たちの研究対象になります。たとえば、eスポーツ、ゲーム実況、2.5次元文化、ゲーム産業、聖地巡礼、フェスティバルなどが、具体的な研究対象として想定されています。

これらの対象の実態や原因、その影響などを、皆さんがこれまで大学で学んできたさまざまな概念・理論や、データ収集・分析のための方法（インタビューやフィールドワーク、質問紙調査、ドキュメント分析、実験など）に基づいて明らかにし、卒業論文を書くことが、本チームに参加する人には求められます。メディアの文化と産業に関心を持ち、これらを学術的に分析する意欲を持つ方の参加を期待します。

推薦論文

『特定の地域を舞台にしたアニメがファンに与える影響

—『ゆるキャン△』聖地巡礼者を事例に一』（遠藤栞里、2021年度）

『なぜ人はカップルYouTuberに惹かれるのか』（山口あみ、2021年度）

『量産型オタクの生態—ジャニーズオタクのインタビュー調査から—』（佐藤暁穂、2021年度）

『Big Fiveにおける性格特性がASMR得点に及ぼす影響について』（佐藤暖乃、2023年度）※チーム賞

『アルバム収録曲の歌詞から考察するHey! Say! JUMPの進化』（伊藤あみ、2023年度）

『デビュー前のアイドルを応援するファンの行動と心理

—ジュニア（旧ジャニーズJr.）ファンを中心に』（岩崎風香、2023年度）

『Mr.Childrenの歌詞の年代別特徴とメンバーの心境』（長谷川美侑、2022年度）※人間科学科長賞

『アパレル業界における消費者の考え方と行動の関係』（對馬一華、2022年度）